

「妖怪・びろ〜ん」



小学校3・4年生の頃、書店の児童書売り場には、いわゆる「怪奇本」がたくさん並んでいました。「いちばんくわしい地獄大図鑑」「飢餓食入門」など、今なら発禁になりそうな内容ばかりでした。私は動植物や地球・宇宙の図鑑や科学書だけでなく、そういう超自然的な本も好きでした。お小遣いの日待ち遠しく、友人と競って買い揃えたものです。その中でも一番気に入っていた「愛読書」が「いちばんくわしい日本妖怪図鑑」(ジャガーバックス刊)です。もう40年も前の本ですが、幸い手元に残っていました。まず、表紙のインパクトがすごいです。きっと、日本中の子どもに、凶悪なトラウマを残した本に違いありません……。

ボロボロになった本を開くと、当時の京王線の駅時刻表が挟まっています。子どもたちの間で、駅の時刻表を収集するのが流行していたのです。それを見ると、当時の京王線は1時間に3本しか走っていなかったとわかります。私は小学校まで電車通学していたので、きっとこの本を京王電車の中で読んでいたのでしょう。ほかにも、府中の駅前で拾った「はずれ馬券」やら、駄菓子屋で買った「スカのくじ」やら、火薬鉄砲の弾やら、怪しげな「ブツ」がいろいろ挟まっていて、相当の悪ガキぶりが想像できます。

その本の中で、一番印象に残っていた妖怪が「びろ〜ん」です。私はそのページを開く前に、記憶の中の説明文を思い出してみました。「びろびろびろ〜んという呪文」「仏様になり損ねた」「塩をかけると消える」など、断片的に思い出せました。40年ぶりに記憶をたどったのに、ほとんど瞬時によみがえりました。果たして、その記憶は本の文章と合致していました。人間の脳ってすごいな!と妙なところで感心しました。

この妖怪は、またの名を<ぬりぼとけ>ともいう。「びろ・びろ・びろ〜ん」という呪文をと覚えて、ほとけさまに化けようとしたところ失敗してこのような姿になったのだ。全身がコンニャクのようにぶよぶよしていて、そのしっぽで人の顔や首をなでる。塩をかけると、消えていなくなる。



こんな妖怪、一体誰が考え出したんだ！と思うような、悲惨な妖怪ですね。しかし、よくよく調べると、江戸時代の文献にすでに掲載されていたそうです。私はこの「びろ～ん」の素材（組成）について考えてみました。

1、「全身がコンニャクのようにぶよぶよしていて・・・」

このことから、シリコンゴム系、或いはスライム系の、ブヨブヨした質感の物質でできている体と思われる。

2、「塩をかけると、消えていなくなる。」

ナメクジと同じ性質である。つまり、体のほとんどは水分で構成され、塩（重曹や砂糖でも良い）をかけると、その水分によって水溶液になり、浸透圧を生じるような体ということだろう。真水をかけると、復活する可能性もある。

以上のことから、「びろ～ん」は高分子吸水性ポリマーのようなものでできているのでしょう。あの、「縁日」「ガチャポン」「秋葉原の駅前」などで売っている、水に漬けるとブヨブヨに巨大化する、恐竜のおもちゃと同じです。もし、このおもちゃの「びろ～んバージョン」をどこかで売っていたら、是非教えてください！



さて、この「びろ～ん」、実は守護神として絶大な効果があることがわかってきました。左の画像は、私が自作したキーホルダーですが、これを持っていると不思議と癒されます。どんなに困った状況に陥っても、「コイツの悲惨さよりはマシだな」と思うと勇気が湧く――という効能です。すでに10名前後の方から、絶賛ご好評をいただいています。ご希望の方には無料で差し上げますので、ご住所をお知らせください！

（お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋）